

I 解答例

問一 顔のある個人ではなく、消費や行動などを数値化された存在でしかないということ。

問二 ホテルは、使用可能な部屋と期日を任意に設定できるカードキーによって宿泊客の行動を管理していると同時に、スタッフや掲示によっても、宿泊客の行動の規律を監視しており、両者は対立せずに補完しあっているため。

問三 確かに帝国は、人間を顔のある個人としてみなさず、匿名の群れのサンプルとして家畜のように扱いはするが、そのように全体の統計を取って管理することは、公衆衛生など生活水準の向上にも貢献しているため。

問四 私たちの社会では、顔のある個人に出生を強制することは規律訓練の審級の点で許されない一方、女性を匿名の集団として管理する生権力の立場から、出生とその環境整備の必要性を主張することは同時に可能であり、矛盾しないと合意されているため。

II 解答例

問一 トリニティ・サイトの荒野で、音を立てて動くものが人間のみであるという原爆の威力を目の当たりにした「私」は、いまだに放射能が強く残留していることに衝撃を受けたが、それでも自然の生命力が放射能の影響を乗り越え、新たな生物の営みを生み出す可能性はないのか、という願いを持っていたから。

問二 「私」がトリニティ・サイトで実感したのはその周囲の静寂だったが、その静寂を「無音の波」と表現することにより、かつて原爆が爆発した時に生じた衝撃波が大地に与えた痛みと、泣くことも叫ぶことも出来ない大地の沈黙とを読者に想起させている。それと共に、「私」自身も被爆した時のことを思い出し精神的に追体験している様子を、比喻を用いて表現している。

問三 「私」は被爆した日にはひたすら逃げることでしか出来なかったが、被爆した大地の痛みを気付くことによって、自分の苦しみが世界の苦しみとつながるものであることに思い至り、他者の苦しみに涙を流す心情が生じたと共に心の奥に抑え込んできた人としての自らの被爆体験をも受け入れていくようになったから。

※八月九日には人間性を剥ぎ取られ一方的に暴力にさらされる立場であった「私」が、いまは大地の痛みへの想像力が生じたことから人としての自らの被爆体験に向き合い受け入れていくという、トリニティ・サイトを訪れたことによる「私」の気付き、変化を記述しているかどうかを見る。

問四 半世紀も前の放射能が残存していることを得意気に示す係官と原爆の威力に感動している周囲の人々を見て、彼らは放射能と共に生きる「私」のような被爆した当事者や大地の存在には思いが至らないのだろうと気づき、また同時に、日常的であるがために自らの身体に放射能が残存していること自体を「私」自身も忘れていたことに思い至ったから。

Ⅲ【解答例】

問一 古人が書いた書物を読んだとしても、そこに書かれた言葉からは、古人の心が理解できないのと同じように、車をつくる決まりごとを心の中でわかっていても、子どもに言葉で伝えることはできない。それと同じように、心の中では、和歌の善し悪しを理解している人々も、それを言葉で他の人に教える力はない。

* 説話の内容と本文の趣旨の関係が理解できているかどうかを見る。

問二 演奏がそれなりに上手な人でも、演奏の技術を正確に耳で聞き分けることはできないように、歌をそれなりに上手に詠めたとしても、歌の本質に迫っていない人が多いということ。

* 傍線部(b)の前後は、歌を詠むことよりも、歌を見て知り、心得ることの大事さを述べている。管絃に即していえば、それは耳で演奏を聞き分けることあり、傍線部(b)の後に具体的に述べられている。傍線部(b)前後の文脈をしっかりと把握できているかどうかを見る。傍線部(b)という「心」とは、作者の心情というよりも、前文にある「歌を心うる」「歌を見しり心えたること」に通じる言葉で、本質、真髓などの意で用いられている。

問三 自分の心の中でいい歌だと思えることがあるかも知れないけれども、それは歌を知らないことと同じである。

* 助動詞の意味を踏まえて、古典文を正確に読み解けるかどうかを見る。

問四 万葉集や古今集にある言葉を使ったからといって、すばらしい歌が詠めるわけではない。歌は自分の心から発するもので、言葉自体に善し悪しはないからである。

* 本文全体の趣旨を踏まえて理解できているかを見る。前文の「ふるき詞によりて、その心をつくるべし」にある「心」は、本文の趣旨である、歌は「心」から発するものという趣旨とは違う意味で用いられており、古い詞で歌の趣向を作るということで、傍線部(d)の理由とはならない。

IV 解答例

問一 a まさにゆかんとす b おさむ(ま)るゆえん

問二 鳥や獣でさえ仲間が傷つけられるのを憎むのだから、君子であればなおさらである。

問三 世の中に道義があれば姿を現し、道義が無ければ姿を隠す。

問四 国に道義が無いにもかかわらず、世に出て、その結果として富や高い地位を得るのは、君子として恥ずべきことである。

問五 趙簡子は、正当な理由もなく臣下を殺害するような道義無き政治を行っている。そのような君主のもとに行くことは危険であり、君子として恥ずべきことであると考えたから。